

立山の天然水～高山から深海まで～ 環境省自然公園指導員 大野博美（会員）



ガット出の水清掃活動

古より山岳信仰の対象になってきた立山は環日本海地域における最高峰。

そこに広がる厚く降り積もる雪、雪解け水をろ過する地質、雪解け水を蓄える森林のおかげで、天然水が豊富に生まれ、水は季節と共に表情を変えながら大地を巡り、おかげで様々な動植物が息づき、文化や産業も生まれたという。

めぐる水が作り出した独特の景観から、多様な自然特性・独特の文化が

- ◆立山の雪の大きな特徴はひと冬で多量に降り、ひと夏で多量に解けること。
- ◆特殊な自然条件下で残ったのは極東地域の南限となった立山の氷河群。
- ◆湿原が大量の水を貯える天然の貯水池弥陀ヶ原。
- ◆湿原を巡った水が一筋の称名溪谷。激しい流れが大地を削る称名滝。
- ◆その水の力に削られ滝が後退してきた称名川
- ◆立山連峰の雪解け水が麓を潤す常願寺川扇状地。
- ◆常願寺川扇状地の末端に位置するいたち川は生活の中の湧水。つまり水によって立山連峰と繋がっている。
- ◆沿岸近くで急激に深さを増す富山湾の表層は対馬暖流、深海は深層水（冷水）。



作成：立山カルデラ砂防博物館

街中の泉と地球の運動には、地球サイズの不思議や驚きが

- ◆泉は、地下からわき出るきれいな水でできている。
- ◆きれいな水は、雨水が、水をよく通す地層を通してできる。
- ◆水をよく通す地層は、火山の噴火でできた。
- ◆火山の噴火は、地球の地面が動いて起こった・・・。

富山の名水

変幻自在に形を変え私たちを魅了する風景には、水が作り上げた世界があり、今も立山の姿を変え続けています。目にできるのは変わりゆく一瞬の姿ですね！私はこれからも身近にある富山の名水を通して水景観を楽しみ、水を味わい、水と人との関わりの歴史に思いを馳せながら水に感謝したい。

お好みの湧き水に出逢えば、それが私にとって大切な名水「地球遺産」です。



黒部市「箱根の清水」探訪

機関紙 40号発行にあたり

理事 石川 道子

平成18年岡岸喜義会長さんの勧誘に即入会しました。期待通り、名水探訪を通して県内を大人の遠足気分楽しく回り、会員の皆さんと親しく交流できました。この会への参加は、第2の人生を豊かなものにできたと嬉しく思っています。

広報担当理事として、名水探訪の折に写真を撮影し、機関紙を制作してきました。年2回発行の機関紙は、40号になり会の啓蒙と会員の情報交流のお役に立てたように思います。これだけ継続してこられたのは、理事の方々・会員の皆様のおかげだと感謝しています。近年の名水探訪では、生水飲用の不安や会員の高齢化という問題点はありますが、できる限り参加し、皆さんから元気ももらって続けたいと願っています。

創立20周年おめでとうございます！

理事 松岡 道子

平成19年、石川さんに誘ってもらって自遊塾に入会しました。夫が逝き仕事も退職し、独りぼっちになった私がかからの生き方を模索していた時の願ってもないチャンスでした。「大人の遠足だと思って気軽に入ってみない？」その言葉に心が躍り始めました。「どこかに行ける！」「新しい仲間ができる！」こうして私の人生後半の幕が開きました。この出会いがなかったら…と思うと感謝の気持ちでいっぱいです。

最近はメンバーが減り少し淋しくなりましたが、当初は、夏場月2回の名水探訪に加え、冬季には1泊の県外名水探訪も企画され、一人ではいけないたくさんの場所を巡りました。私も微力ながら、広報担当理事として、機関紙の校正・発送に携わっておりますが、名水探訪の企画・会の運営をされている方々のご苦勞に頭が下がります。今後この会が継続し未来に繋げていけたらと願っています。

「地下水の定義」

会員 鈴木 康裕

近年、名水とか、おいしい水といったことが話題に上がってきました。元々、水の豊かな地方では、水自慢の風潮があり、それは郷土の自然の美しさをも、水に託したといえるでしょう。

さて、地下水の定義とは何でしょうか。

- ① 河川・湖沼等の水が地中へ浸透し、その近くの透水層に流れる浅い地下水を「伏流水」といいます。
- ② 不透水層（粘土層）の上部を流れる「不圧地下水」。「自由地下水」とも言い、井戸になります。
- ③ 不透水層（粘土層）の下部を流れる深い地層中にある「被圧地下水」。自噴井となります。

ところで、一般に地下水は水道水より美味しいと言われていています。その最大の理由は水温が低いことにあります。県内の扇状地では、10～14℃程度です。さらに二酸化炭素を含み、それが炭酸となり、炭酸飲料を極く薄くした状態にあります。このように、水温が低く適量の炭酸を含んだ微酸性の地下水は、私達にさわやかさを感じさせてくれます。